

●講演「共に生き 共に咲かせる 幸せの花」

小林 慶太郎 氏 (四日市大学副学長・(仮称)長久手市自治基本条例制定アドバイザー)

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました、四日市大学の小林と申します。

今日は、大きく三つのことをお話ししますが、まずは、この地域のことについて少し考えてみたいと思います。

1. 地域社会の多様化の時代を共に生きる

高齢化の進行や障がい者数の増加

先ほど市長からも、これからの時代に向けて、皆さん考えていきたいと思いますという話がありました。これからの時代、どんな時代がやってくるのだろうか。皆さんは耳にタコかもしれませんが、高齢化という話をよく耳にされるとと思います。

全体の人口に占めるお年寄りの比率が、じわじわ上がってきています。今、全国で人口の何人に1人がお年寄りかご存じですか。全国で言いますと、大体25%から30%の間くらいのところですよ。

これに比べると、長久手市は若い街で、まだまだ高齢化は心配ないというお声も、耳に入ってくる場所なのですが、本当でしょうか。今から20年、30年先は、今、全国で言われているのと同じような状況が、長久手市にもやって来る、全国よりちょっと遅いだけのことなのです。

今、全国で高齢化、高齢化と散々言われていますけれど、やがて高齢化社会がやって来るよというのは、全国的に言っても、今から20~30年くらい前には読めていた話なのです。でも、今から20~30年くらい前、誰が高齢化に向けて今から手を打とうと動いていましたか。全国的にもそういう動きはあまりなかったです。

いざ、実際に目の当たりに高齢化が来て、大変だと言っています。全国の人たちがこうやって慌てふためいているのを見て、長久手市は先手を打ってやっていきたいと思います、この地域の中で皆さんが考えていくといいのかなと思います。

それから、高齢化が進行しているだけではなくて、障がいをお持ちの方も増えているのです。おそらく、昔なら障がいをお持ちの方が命をつないでいくことは難しかったのかも



しれないですけど、今は医療も福祉も進歩してきて、障がいをお持ちの方でも暮らしていけるようになってきています。身体障がい者は圧倒的に高齢者に多い、つまり年をとってから何らかの障がいを負うケースが多いのです。

もし自分が何かハンディキャップを負ったときにも、この地域だったら暮らしていける、そういう地域であってほしいと思いませんか。

さらに、年齢階層を問わず、働き盛りの世代、30代、40代、50代から高齢の方、どの世代にも精神障がいの方、メンタルを病む人が増えています。生きづらい世の中なのかもしれない。それでいいのだろうか、これも考えていきたいところであります。

価値観やライフスタイルの多様化

長久手市の外国人住民の数は、じわじわと増えており、わずかこの5年くらいの間でも、かなりの数が増えています。いろいろな国の方が、このまちで共に今、暮らしています。

そういう文化的な背景が異なるだけではなくて、一人一人の在り方もたぶん変わってきているのだらうと思います。どういうことでしょうか。

いろいろな情報通信機器があります。皆さん、どんなものをお持ちですか。多くの方は今スマホを持っていると思うのですが、ほぼ9割くらいの普及率だった固定電話は、今どっと落ちてきています。問題はということかということ、情報のパーソナル化が進んでいるということです。

ついでにちょっと面白い話をしましょう。

全国にコンビニエンスストアはどれくらいあるか、皆さんご存じですか。一体年間にどれくらいの方が利用しているか、ご存じでしょうか。ちょっと皆さんに聞いてみましょう。今、たぶんこのホールにいらっしゃる方の平均として言うと、週に1度くらいかなという感じですね。でも2、3日に一度はコンビニに行っているというのが、世の中の平均値です。もっとヘビーユーザーの方もいらっしゃいます。

どんな人が、このコンビニのヘビーユーザーなのでしょう。そこで考えてみると、昼夜3交代で工場で働いているよという方も、夜中にトラックで配送をしている方もいらっしゃるということに思い至るのではないのでしょうか。

この人たちは、明け方に喉が渴いたなど、熱中症予防で何か飲もうかなとコンビニを利用されると思います。

こういったさまざまなライフスタイルの人がいて、コンビニエンスストアを支えています。

す。われわれ、今日ここにいらっしゃる方々の平均値とは、かなり異なる類いの人たちも世の中にはいるのだということです。

世の中は実に多様なのです。ライフスタイルも多様、住んでいる人の仕事も多様、国籍も文化も多様です。年齢も多様だし、体の状態もさまざまだよという話をしました。

多様性を受け容れて共に生きるということ

私たちは、この多様性と、それぞれの人の自由を認め合う懐の深さを持って、次の世代にこのまちを引き継いで、みんなで手を取り合ってやっていきましょう、こんなことが、皆さんのまちの条例、みんなで作るまち条例には、書いてあるのです。

みんなというのは誰でしょう。みんなというのは市民です。長久手市民です。長久手に住んでいる人。ですが、実は住んでいる人だけではないですね。長久手市に働きに来ている人、あるいは、長久手市内で学んでいる人、市内でお仕事をされている人、そういったさまざまな人たち、この長久手に関わっているいろいろな人たちが、長久手のまちをみんなで手を取り合って、つくっていくと考えたほうが、いいまちができそうです。こんなことも条例には書いてあります。

そして、自分と違う意見を認める、他者の多様な価値観を認めます。自分と意見が違う人とぶつかると、煩わしいし、面倒くさいと思う人もいらっしゃると思います。

でもいいのです。いろいろな人がいるのだから、最初からうまくいくと思うほうが無理があります。やっぱり揉めます。ぶつかります。いいのです。揉めて、ぶつかって、それで、その中からどうしたらこの人と折り合いがつくのかなと考えていくと、新しいものが出てくるのです。そういうことなのではないでしょうか。

2. 共に取り組むまちづくり

多様性の受容 (Diversity & Inclusion) が拓く未来

多様性を受け入れるということに関しては、国の経済産業省が、ダイバーシティ経営を進める企業を表彰しています。これは企業の話なので、まちづくりの話とは少し違うかもしれないですけども、いい話だと思ったので今日ご紹介します。

ダイバーシティ経営とは、多様な人材を生かして、その能力が最大限発揮できる機会を提供することで、イノベーションを生み出し、かつ創造につなげている経営ということです。多様な人材って何でしょうか。先ほども見ました性別、年齢だけではなくて、人種や

国籍が違うということもあります。あるいは障がいの有無、性的指向も、人それぞれです。宗教、信条、価値観など、そういった多様性もあるし、さらに、働き方とか、キャリア、経験の多様性もあるでしょう。

そういう多様な人たちの能力というのは何でしょうか。能力というのは、その潜在的な能力、あるいは特性です。



そして、それが一体どうして経営に役に立つのでしょうか。昔は物をつくればいくらでも売れたのに、最近はどうも売れなくなってきた。「どう思う？」と社長が社員に聞いても、今までみたいに、みんなが同じ発想しかできない会社だったら、「いや、困りました。社長、われわれ

もそこは悩んでいるんですよ」と同じ意見しか返ってこないです。これでは、立ち行かなくなります。

そういうときに、社長が「どう思う？」と聞いてきたら、「いや、社長、今までちょっと言わないでいたんですけれど、全然違う考えを持っているんです」とか、「私がこれまで経験した話で、実はこんなことを知っていますよ」とか、思いもよらない話を出してくる人がいたほうが、「それは気付かなかったけど、なるほどそういう見方もあるね。今までそんなことをやったことがないけれど、試してみましよう」と、今までとは違うやり方に転換していくことができるじゃないですか。多様な人がいたほうが、しなやかな方向転換できます。だから、いろいろな人を大事にしようよというのが、経済産業省の言っているダイバーシティ経営です。

たぶん、地域でも同じことが言えるのではないかと思います。長久手市の条例には、多様性と個人の自由を認め合うことが、ちゃんと踏まえられているのです。みんなで手を取り合い、誰もが笑顔で暮らせる幸せなまち長久手、を目指して行こうということです。誰もが笑顔で暮らせる幸せなまち、これがポイントだろうと思います。

先ほど言ったように、いろいろなところで揉めるかもしれないし、煩わしいかもしれませんが、でも、そこを乗り越えたときに、一緒にやっていて良かったという達成感、そして笑顔になれる、そんなことがあるといいなと思っています。

新しい公という考え方と補完性の原理

今までは、役所がやることと民間がやることは、それぞれ役割分担になっていて、別々でした。

「公私は別だ。役所のやつらは」とか、「どうせ民間は」とか、お互いに見下し合っていました。それではうまくいきません。役所も市民も、みんな手を取り合って、一緒に公共空間をつくっていきましょう。こういう時代が変わってきたよという話しです。

そして、その考え方の一つとして、補完性の原理というのがあります。できるだけ小さな単位でできることは小さな単位で、個人でできることは個人でやろうということです。

家族でもできないことは、どうしましょう。私はちょっと体調が悪くてと言うと、「いいです、いいです、休んでいてください。私たちが一緒にやりますよ」と、隣近所が助けます。そこでも助けられないことは地区、地域です。小学校区くらいの範囲でしょうか、子どもたちの見回りだったり、お年寄りの見守りだったり、防災などもそうかもしれないですが、地域で取り組んでいきます。隣近所よりももう少し広い範囲のほうがいいかもしれません。

それでもできないことは役所がやればいいですし、市ができないこと、例えば福祉の仕事はやるけれど、保健所の業務はちょっと市では荷が重いなということは、県がやってくださいよと。県でもできないことは、国がやるでしょう。東日本大震災級の災害が来て、国でもどうにもならなくなってきたら、そのときは国際社会に助けを求めたいと思います。

そうやって、小さなところでできることは、できるだけ小さなところでやるわけです。だから自己責任、自分の範囲でできることは自分でやろうよ、だけど、自分でできないことは助けを求めようという考え方で、地域のことも考えていったらどうでしょうかというのが、補完性の原理です。

3. みんなで幸せの花を咲かそう！

みんなの対話で まちの課題について 考えよう

そういうことで、みんなでこの長久手市に幸せの花を咲かせていていただきたいと思うわけです。まずは皆さん、それぞれ先ほど言った煩わしいことを乗り越えて行って、しっかり対話をしていただく。このまちはどんな課題があるのだろうか。どうすればこの課題を乗り越えられるのだろうかと考えていきましょう。

どうすればいいのかというのは、いろいろな方法があると思います。もう諦めようとい

うのも一つの方法かもしれません。いやそうじゃない、お互いがつながり合うために、お互いが知り合うために、何かいろいろなことをやっていこう、そんなイベントごともあるかもしれません。

考えたらば、実行しないと駄目です。「誰も協力してくれないからできない」とよく言います。

100%協力してもらえないとやれないのだったら、いつまで経ってもできないです。やれる人、やりたい人からまずは始めて、実際に形を示していくと、「あ、何だ、あの人、口で言っても全然意味が分からなかったけど、形を見てみたら分かった。それだったら俺も協力するわ」という人が現れます。まずはやってみることです。

それで本当にうまくいったの？ 結果をちゃんと評価して、本当にうまくいったらそれを続けられればいいし、うまくいってなかったら、またやり方を考えればいい。次の問題が見つかります。PDCA サイクルといますけれど、皆さんのまちの問題についても、これでやっていってもらいたいのではないかと思います。

他のまちの事例から考える ①地域活動団体の取組み ～刈谷市小垣江地区～

まず一つ目は、地域活動団体、地域の団体の取組で、刈谷市です。同じ愛知県ですけれども、ここからちょっと南のほうです。三河のほうの刈谷市小垣江という地区があります。

小垣江地区の人たちは、地区の課題って何だろうね。災害が起きたときの備えが、うちの地区は十分ではないのではないかな。一応自主防災会はあるのだけれど、小学校区で100人くらいいるだけでは、何ともならない、よし、ちょっと本気で取り組んでいこうということになりました。

「地区に眠っている人材がいるんじゃないかな」と、口コミで「あその人は元消防署に勤めていたらしいよ」「じゃあ、そういう知識があるね」「ちょっと手伝ってくれよ」「あちらの奥さん、昔看護師さんだったんだって」「じゃあ、災害のときにけが人とかが出たら、あの方が手当てしてくれるんじゃない？」「ちょっと奥さんひとつ頼むわ」こうやって、口コミでいろいろと情報を聞き出し、いろいろな人たちを巻き込んでいって、地域の防災の組織を大きくしました。

ここでは、徹底した防災訓練をしています。例えば病気やけがの人が出て、担架で運びます。防災訓練だったら、担架がどこからともなく現れるかもしれないですけど、実際の災害のときに担架なんてありますか。ではどうしましょうか。その辺の物干し竿を持つ

て来て、そこに自分たちの着ている服の両腕を通すのです。そうすると即席の担架ができます。本気の防災訓練です。

他のまちの事例から考える ②市民活動団体の取組み ～四日市とんてき協会～

私は、四日市とんてき協会という団体の代表理事で、四日市でまちおこしをしているという別の顔があります。

未だに教科書には、四日市は全国の4大公害の地として載っています。四日市という地名は、恐らく小学校中学校の社会科の教科書のどの单元にも載っていないで、公害のところにしか載っていません。だから、全国の人には、四日市は、イコール公害で刷り込まれています。イメージが悪いのをどうにかしようということで、最近はやりのご当地グルメ「とんてき」に目を向けて、いろいろな取組をしています。

これも、最初に始めたときには、総スカンでした。あんなものを四日市の自慢みたいに言っているけれど、そんな大したことのない食べ物じゃないか。四日市の代表とか言われたらかなわんぞとか、散々周りの人に言われて足を引っ張る人がいました。

本当に揉めるのではないですけど、煩わしくて止めようかと何度も思いましたが、やっているうちに、テレビのメディア、CBCの取材を受けたりなんかして、だんだん知名度が上がってくると、もうケチをつける人はいません。

他のまちの事例から考える ③まちづくり組織の取組み ～知多市南粕谷コミュニティ～

愛知県知多市の南粕谷のコミュニティの話です。

南粕谷という地区は、知多市のとなり東海市にある新日鉄の社員さん向けの住宅地として発達してきたところなんです。発達してきたと言うと響きがいいのですけれども、ある一定の年にその住宅地を一斉に売り出して、多くの人が住むようになり、それからもう何年もたっています。

新興住宅地は、夫婦と子どもで住み始めるでしょう。その子どもが20歳くらいになって、進学や就職して出て行く子どもがいます。あるいは、結婚して別に家を構えます。

新興住宅地で育った子どもは、残念ながら、その親と同じ家で、あるいは、結婚した後もその近所に住み続けて、自分たちがそのまちを継いでいくことは少ないと感じます。南粕谷もそうで、高齢化してきています。

どうやって自分たちの元気を維持しようかと考え、みんなで寄って、集まって、体操し

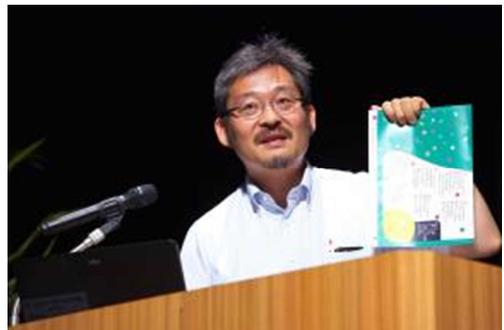
たり何かしたりすることで、認知症防止をしよう、健康維持をしようという元気会という活動を始めました。

ところが、さらに高齢化してくると、どういうことになるでしょうか。元気でいられなくなってしまう。そうなってきたらどうしたかという、今度は、おたすけ会です。家の電球を取り換えるのに、近所に頼れる人がいないです。そこでボランティア組織をつくって、地元の人がお互い支え合うような仕組みをつくりました。

さらに、地域の人々の居場所として、南粕谷ハウスというのをつくって、ここに行けば誰かしらみんながいて、1人にならないで済みます。話し相手があります。

「みんなでつくるまち条例」を活かして

みんなでつくるまち条例ができて、これを生かしていかなかったらしょうがないのです。この条例を生かして、どうやって誰もが笑顔で暮らせる幸せなまちを実現していくことができるのか。ここが今、問われていると思うのです。



ぜひ、このシンポジウムも一つのきっかけにしていただいて、お互いに、相手と自分とは違うのだということを尊重し合いながら、一人一人が我がこととして考えてください。一生懸命皆さんで対話をして、この手を取り合っ、やれること、やりたいことからやっていっていただければいいと思います。そうすれば、恐らく必ずや笑顔のあふれる幸せなまちになっていくのではないのでしょうか。

この条例を機会に、皆さまのまちづくりがさらに深まっていくことを期待して、私の、前座としての講演はおしまいとさせていただきます。

皆さんご清聴どうもありがとうございました。